

# 平成26年度第2回農業大学校外部評価委員会 議事録

I 日 時 平成27年2月24日(火) 10:00~12:00

II 場 所 大分県立農業大学校 会議室

III 参加者 外部評価委員

教育関係者	大分県高等学校教育研究会農業部会長 (日出暘谷・日出総合高等学校長)	清末 隆文 氏
生産者	大分県指導農業士会長	藤野 渉 氏
生産者	地元女性農業者	古庄 京子 氏
生産者	大分県農業法人協会長	増田 徳義 氏
農業団体	大分県農業協同組合常務(営農担当)	坂本 茂則 氏
行政	豊後大野市農業振興課長代理(係長)	伊東 克芳 氏
行政	大分県中部振興局生産流通部長	森本 亨 氏

農業大学校

校長、副校長、次長、農学部長、研修部長、教務・学生課担当

IV 次第

1 開会 (進行：植木次長)

2 あいさつ

(1) 校長あいさつ

(2) 外部評価委員長あいさつ

3 議事(議長：清末委員長)

(1) 平成26年度重点目標の取組状況及び評価について

## 運営方針1「活気あふれる学園づくり」

### 【数値目標】基礎学力を備えた入学生の確保：60名について校長より説明

《質疑・応答》

(古庄委員)

- ・従来よりも学生数が増加しているのは、農大のPR方法が有効であると思われる。普通科系出身者も増やして欲しい。

(大学校)

- ・県内の高校すべてを訪問し、学生募集を行っている成果が見えてきている。今後も、更に農業系学科以外からの希望者を増やすよう編入学等についても充実させたい。

(坂本委員)

- ・過去5年間、入学辞退者が数名毎年あるが辞退理由は何か。

(大学校)

- ・主な理由は経済的理由である。入学者は諸経費約60万円を3月末までに学校に納入しないといけないため、中には準備できない家庭もある。対策としては、分納による方法も提案し、入学者説明会でも保護者に伝えている。

(藤野委員)

- ・現在の在校生で県外からの入学者の割合はどのくらいか。またその県外の学生はなぜ大分農大を希望したのか。

(大学校)

- ・1年が54名中1名、2年は39名中8名で、計9名となっている。全体で約1割の

県外出身の学生が在籍している。また県外の学生が本校を希望した理由として、学校ホームページで本校の情報を得る中で入学を希望したことや、県外の学生の祖父母が大分県に住んでおり、夏休み等に帰省した際に本校の様子について話を聞き希望した等があげられる。

(森本委員)

- ・今年度の受験者の中で、社会人の受験者が減少しているがその主な理由は何か。

(大学校)

- ・全体的に景気が良く、一般企業等への就職状況が好調であるためと分析している。

(伊東委員)

- ・確かに、豊後大野市でもインキュベーションの説明に東京、大阪、福岡に出向くが、相談者の数が減少している。景気が悪いと多くなるが、現在のように景気が良くなる希望者が減る傾向にある。

(清末委員長)

- ・次に、ホームページについて更新件数は25回とあるが、日出総合高校での学校評議委員会の意見でも、更新の回数ではなく、適宜に知りたい情報が得られるかが大切であること。また、数年前の記事が、そのまま残っているようではあまり効果的でないことを指摘された。農業大学校のホームページを拝見したが、トップページの項目が50程度あり、古い記事がそのまま残っているものがある。限られたスタッフでタイムリーな更新は難しいのではないかと。閲覧者が見たい情報がその時々で得られるための工夫が必要である。

(大学校)

- ・ホームページは項目が多く、似ている内容も多くあるため精選が必要である。ただ更新はだれでもできるわけではなく、専門的な知識が必要であるため一部の職員への業務の負担が大きい。外部に向けた情報発信源としてのウェイトも大きいため、今後もホームページの有効的な更新を含め、その活用と推進について検討していきたい。

(清末委員長)

- ・それでは、運営方針1「活気あふれる学園づくり」基礎学力を備えた入学生の確保：60名については、大学校の自己評価は3であり、委員会側としても同様に、目標をほぼ達成していると捉え、評価3としたい。

(全員了承)

## 運営方針2「質の高い教育の提供」

### 【数値目標】全国大会出場最低1名1課題について校長より説明

《質疑・応答》

(清末委員長)

- ・日本農業技術検定で1級を取得している学生についてお聞きしたい。

(大学校)

- ・合格した学生は、2年の男子学生で、大変優秀な学生である。農業関連企業に内定をいただいている。

(古庄委員)

- ・12月にある校内プロジェクト発表会を毎年、見学させてもらっている。以前は何人かの発表がずば抜けて良いといった状況であったが、最近では、全国大会に進む学生と同様に、発表レベルが全体的に向上している。

(清末委員長)

- ・農業技術センターとの連携により、プロジェクトの取組内容についてもレベルアップしている。そのような中、高校側としても、その高度な内容についていけるだけの生徒を送る必要がある。大学校では、平成23年度より推薦入試において、選考試験に数学を実施している。そのため学力がないと農業大学校に合格できないことを高校側

も十分理解されている。

(清末委員長)

- ・それでは、運営方針2の「質の高い教育の提供」全国大会出場最低1名1課題については、大学校の自己評価は4であり、委員会側としても同様に、目標を完全に達成していると捉え、評価4としたい。

(全員了承)

### 運営方針3「新規就農者の確保」

【数値目標】全学生・研修生の進路決定、就農率80%以上の確保について校長より説明  
《質疑・応答》

(森本委員)

- ・進路内定状況に農業関係団体とあるがJAも含まれているのか。また自営就農への相談会は研修生のみ参加なのか、学生への働きかけはどうしているのか。

(大学校)

- ・今年はJAへ3名就職することが決まっている。また学生への自営就農に向けた就農相談については、夏休み等利用し個別に各振興局に相談している。

(清末委員長)

- ・進路についてかなりの数の農業法人が確保されているが、各法人とも毎年採用があるのか。また新規の採用であるのかお聞きしたい。また今年から配置されている進路コーディネーターは、こういった経歴の人なのかお聞きしたい。

(大学校)

- ・農業法人の求人割合は半数が継続及び数年ごとの求人、半数が新規の求人である。また、進路コーディネーターは以前、ハローワークで就職相談をされており、キャリアコーディネーターの資格も持っている人物である。学生の適性を見極めながら、自己の進路とマッチングさせるのは難しい状況にあったが、今回、進路コーディネーターのお陰で、学生の適性に合った進路の決定に結びついている。

(清末委員長)

- ・今年7月にあった「農業法人と学生の就職相談会」では何社の法人が来られたのか。

(大学校)

- ・毎年入れ替わりもあるが、今年は27社の法人から参加をいただいている。毎年、数社ではあるが増えている。また、相談会に来校していない法人からも求人をいただいている。

(増田委員)

- ・研修生の就農率が低いのではないかと。本来は農業をするために研修を受けているのだから学生と比べた場合もっと就農率が上がってもよいのではないかと。

(大学校)

- ・研修生でも定年退職されてから、研修に来られる人はほぼ100%就農するが、若い人の中には、ここで農業を体験し現実が見えてくると方向性が違っていたことに気づく人や、収入などの待遇面で条件が合わなかったため就農できなかった例もある。

(森本委員)

- ・青年就農給付金を受けている学生は現在、何名程度いるのか。

(大学校)

- ・1年生が3名。2年生が6名。合計9名が給付を受けている。

(森本委員)

- ・これだけ就農者がいれば、もっと給付を受ける学生が増えてもよいのではないかと。

(大学校)

- ・卒業後、就農しなかった場合また就農したあと3年以内に辞めた場合、返還をしなければならないことなどのリスクを考えた場合、躊躇するため給付を希望する学生が少

ないと思われる。

(藤野委員)

- ・それでは、青年就農給付金を希望する学生は何名程度いるのか。

(大学校)

- ・希望者のほとんどが給付できているため2学年合わせて9名である。農業大学校に進学することにより、青年就農給付金が受けられることについては高校訪問等を通してPRをしている。

(清末委員長)

- ・それでは、運営方針3の全学生・研修生の進路決定、就農率80%以上の確保については、大学校の自己評価は3であるが、委員会側としては、就農率は、ほぼ80%達成されていると判断して、評価4としたい。

(全員了承)

《全体を通しての意見》

(藤野委員)

- ・これから景気が良くなれば非農家の子弟の割合が上がってくるのでないか。農業を教える学校であることを基本として、農家の子弟の確保を行ってほしい。農家の子弟であれば先ほどの青年就農給付金も比較的、受けやすいと思われる。これが農家の支援につながるのではと考える。

(大学校)

- ・現在は、非農家の学生が多く農業法人への就農がほとんどであるが、本来、農業大学校は農業後継者の育成が使命である。そのため農業高校に訪問し農業大学校のPRをしているが、農業高校も生徒のほとんどが非農家出身者となっている。これから農家子弟が増えるため農業大学校教育の質を向上し、農家から認めていただけるような学校づくりが必要であると考えている。そのため、皆様方にもご協力いただきたい。また、地域の中で同窓会組織が機能していけば、農家子弟も増えてくるのではないかと考える。同窓会の組織強化がこれからの課題である。

(清末委員長)

- ・農業大学校の理解者である「農大スカウト大使」といったようなネーミングで各地域の代表を任命し、各農家に農大のアピールをしてもらうことも一つの方法ではないか。

(古庄委員)

- ・これからも、学生には農業大学校の卒業生としてのプライドを持たせるような取り組みをして欲しい。

(大学校)

- ・平成28年度には創立50周年の行事を行うため、同窓会の皆様のご協力をいただきたい。

## (2) 平成27年度 魅力ある農大の実現に向けた取組概要について校長より説明

《質疑・応答》

(清末委員長)

- ・入学後1ヶ月以内であれば学科・コース変更が可とあるが、詳しく説明していただきたい。

(大学校)

- ・第2志望等で入学した学生も多いので、ある程度柔軟性を持たせて、コース受け皿に許容があれば変更ができるというシステムである。希望する学生がいれば検討をしている。また、前回の委員会でも指摘があった5つの科・コースがあるのに2年間で1つのコースだけしか学べないのはもったいないという意見を反映させ、他の科・コースの実習に参加できるようにしている。今年度は、果樹コースの学生が総合畜産科の

実習に参加し畜産に関する学習を深めることができた。

(清末委員長)

- ・次年度は全学生数が100名を超えるが、施設面で支障はないか。

(大学校)

- ・施設面での検討課題については、寮の部屋数が足りないことがあげられる。この点について、現行、1人1部屋としていたが、学生の希望によっては、2人部屋として不足する部屋数を調整することも検討している。また、学校備品等も不足するようになるため、山香農高や森高校から、教室の机や椅子などを調達している。

### **(3) その他 平成27年度主な行事日程について副校長より説明**

《質疑・応答》

- ・平成27年度の行事日程については、特に質問なし。
- ・次年度も、引き続き委員として継続していただくことを校長より依頼。

(清末委員長)

- ・議事終了と進行協力へのお礼、議事内容等については、ホームページ等で公表することを確認。

## 4 閉会